

年間第13主日

福音朗読 マタイ 10・37-42

2023.7.2 9:30 ミサ
カトリック高円寺教会
主任司祭 高木健次神父

「わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしくない。わたしよりも息子や娘を愛する者も、わたしにふさわしくない」(マタイ 10・37)。このイエス様のみことばは、身近な人との関係を断ってイエス様だけに従うということを求めている、そういうみことばとして捉えられるべきではないと思います。イエス様は「互いに愛し合いなさい」ということを、これはヨハネによる福音の中に出て来るエピソードですが(ヨハネ 13・34)、ご自分の新しい掟として残された、そういう方だとして教会はずっと伝えていきます。イエス様を愛するということは、周りの人、出会う人々を愛することであり、そこに繋がっていなければイエス様をほんとの意味で愛しているとは言えないんだということになります。ですから、今日のみことばの冒頭の部分は、決して「他の人々との関係をないがしろにして宗教マニアになりなさい」、そういうようなことではないわけです。

しかし、では他の人々を愛する、その愛し方がどのようなものであるかということが問題になります。場合によっては、周りの人たちが「わたしを愛するためには、これをしてください」ということを言うてくる。「このことを与えることが、わたしを愛することになるんです」と言うてくる。しかし、はたしてその通りにすることが本当の意味で相手を愛することになるのか、ということをおろそかにして考えてみなければならぬ時があるのではないのでしょうか。

そういうわけで、イエス様を愛する、イエス様と共にある、その基準によってわたしたちの他の人への振る舞い方、行動というものが秩序づけられていなければ、それがほんとの意味でイエスの掟に従っていくということにならない。場合によっては相手が望まない、直接望んでいないような振る舞いをしなければ相手のためにならない、そういうこともあるわけです。また、自分自身が相手の言いなりになることで恨みの気持ちを持ったり、自分と相手との関係が実はおかしくなっていく、相手が自分を軽んじるという、そういうような関係で、決して神様が望んでいらっしゃる、互いに尊敬し合い、また与え合う、そういうものにならない。そういう可能性もある。

だから、基準はあくまでも神の視点で、イエス様の導きに従って、他の人々に対してどのようにしなければならないかを考えていく、その大切さを思い起こさせてくれる言葉かなと思います。

今日のみことばのあとのほうは、「預言者を預言者として受け入れる人は預言者と同じ報いを受ける」(マタイ 10・41)。正しい人を正しい人と受け入れる人は正しい者と同じ報いを受ける。それは、わたしたちが自分でどのようにすべきかということを初めから全部分かっているわけではないが、周りの人に教えてもらいながら、学びながら、だんだん気付いていく、成長していく、そんな意味を含んでいるように思うんですけれども、肝心なのは、じゃあ、誰のどんな言葉に聞き従うべきか、ということを見分けていかなければならないということです。聖書に出て来る預言者たちに、そしてイエス様ご自身の言葉にも、多くの人にはそれが預言者であり救い主だということに気が付かず、受け入れずに、耳を傾けなかったということは、わたしたちにとっても無縁ではないわけです。

ですから、今日の福音の前半部分は、周りの人々に対してどのように振る舞うかを、そして後半部分はわたしたちがどんな人に学んでいくべきなのかということを、イエス様、キリストに従うということを中心に見分けていきなさい、という呼び掛けというふうに捉えることができます。そして、その中心が「自分の十字架を担ってわたしに従わない者は、わたしにふさわしくない。自分の命を得ようとするものは、それを失い、わたしのために命を失う者は、かえってそれを得る」(マタイ 10・38-39) というみことばです。これが物事を見極めていくときの柱になる、というわけです。難しい言葉ですが簡単にその一つの側面を強調するとするならば、「ものの判断において、自分にとって損か得かということをお脇に置きなさい。そこから、どのように振る舞うか、誰に聞き従うかを判断しなさい」ということが言えると思います。この自分の十字架を取って、担ってイエスに従う。イエス様ご自身は、自分の損得によってではなく、神の、父のみこころを行う、その思いをもって十字架を担われました。ですから、わたしたちが判断していくときに、損か得か、これは必ずしも物質的な損得だけではなく、「このようにすれば相手に好かれる」とか、「このようにすれば尊敬を受けられる」とか、「いろいろな人に相談するに足る人物として思われる」とか、「受け入れられたい」とか、そういうような自分がどのように他の人から扱われるかというのを一旦脇に置いて、そして今相手に対して何がふさわしいのか、そして自分にとって何が必要なのかをイエス様と共に見極めていく、そういうことが大切なんだろうと思います。

でも一方で、わたしたちはそのようにイエス様に完全に従うのにふさわしい者であるわけではないということを、素直に受け入れて良いわけです。ですから、わたしたちはミサのたび毎にご聖体のイエス様に向かって、「主よ、わたしはあなたをお迎えするにふさわしい者ではありません」と告白いたします。わたしたちはいつもイエス様のものの見方ではない色々なことに引きずられて、そして聞き従うべきではない声に聞き従ってしまう、そういう者である。でも、「だからそのままでもいいんだよ」ということではない。イエス様ご自身がみことばによってわたしたちを変えてくださるというイエス様の恵みに信頼する、そのために、「ふさわしい者ではありません」と言ったあとに、「おことばを頂くだけで救われます」という言葉が続きます。

イエス様の、神様のみことばは必ず実現する。ご自分のもとにわたしたちを招かれる、その招きが実現するのであって、わたしたちの今の取るに足りなさ、ふさわしくないという在り方が打ち勝つのではない、ということに改めて信頼をして、そしてイエス様をお迎えするというのが、ミサの一つの大切な部分、流れになっていると言えると思います。

わたしたちをみことばによって導き、そして変えてくださるイエス様の呼びかけに信頼して、イエスと共に、他の人に対してどのように振る舞うか、またどのような人に、また言葉に、出来事に学んでいくかをふさわしく判断していくことができるように変えられる、その希望のうちに今日も、わたしたちにみことばをくださるイエス様の恵みを頂きたいと思います。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>